

A 97

血中インスリン，エピネフリン等の実験的濃度上昇による代謝異常について。  
玄島大. 三戸 昭<sup>あき</sup>，大澤仁絵，武藤昌子. 福山暁の星栄専 O松本史子  
安田女短大 隈元陽子. 玄島文化女短大 福永英子.

目的 生体におけるメタボリズムの恒常性は 脳神経系・ホルモン系の機能. すなわち物質代謝の調節によって成立することが報告されて10年余になる. 筆者らは 栄養学の基本として. これらを証明してきた. 神経伝達物質(エピネフリン)あるいはホルモン(インスリン等)の継続投与により. 人為的アンバランスを実験動物におこさせ. 代謝調節異常として. 肥満, 糖尿病, 食欲異常が実験的に生ずることを明らかにすることを目的として. 研究を重ねてきた.

方法 実験動物として. 体重200gのラット(倉)を用い. 神経伝達物質としてエピネフリン, ノルエピネフリン, ホルモンとしてインスリン等を用いた. 測定の方法は 蛍光分析, 抗原・抗体反応による方法(従来と同じ方法)を用いた.

結果 1. インスリンの継続投与によつて. 食欲亢進, 体重の過剰増加(肥満化)が認められた. 2. エピネフリンの継続投与によつて. 食欲の減退化, 体重増加の抑制, 血糖値, 血中脂質の変化がみられた. 3. ゴールドチオグルコースによる肥満ラットは. 血中インスリンレベルの上昇が認められ. 続いて. 肥満化が生じた. 4. アロキサン投与により. 血中インスリンレベルの低下が生ずるが. これにインスリンの継続投与によつて. ある程度. 血糖レベルの上昇の抑制, 糖尿病の抑制効果が多少認められた.